

名戸ヶ谷ビオトープだより

第32号

2008年8月1日

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

<http://nadogaya-biotope.org/index.html>

発行責任者： 篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

コナギに勝ちました！

7月21日にもち稲とうち稲の両方で稲の花・出穂が見られました。昨年と違って立派な株に育っています。田植えからほぼ毎週のように草取りをしてきましたが、お陰で今年はコナギをはじめ、雑草に勝ちました。一部にイヌスギナが残っていますが、影響はないでしょう。出穂前に追肥の散布も済ませました。暑い中の作業、みなさん本当にお疲れさまでした。水中動物や蛙、蜘蛛、カマキリ、イナゴの幼虫も多く見受けました。穂が出揃ったら水を落とし、台風と雀対策を行います。収穫までがんばりましょう。(小笠原 智)



ミネラル散布後の水田に一最後の有機肥料(ボカシ)散布



梅雨明け近い7月19日の合同作業終了後、水田部会の活動を開始した。水田周りの草刈りをしながら出穂間近い稲を観察すれば、今年丹念に行った「コナギ退治」の成果の印として見事な稲の生長ぶりである。

畦周りもさっぱりとしたあと、最後の有機肥料(ボカシ)を散布し、作業を終えました。美味しいお米となるよう6月末にはミネラルも散布しています。(窪田孝志)

名戸ヶ谷小学校の観察会 — 2年生児童55名がビオトープで

6月4日(水)、2年生児童55名によるビオトープの生きもの・植物観察会が行われた。前日の雨天に加えて、当日は曇天のため、生きもの動きは活発ではなかったが、水中の生きものであるモツゴ、タイリクバラタナゴ、ドジョウ、スジエビ、サカマキガイ、ヒメタニシやニホンアカガエル、アマガエルなどを採取して観察した。

また植物の観察は、初めての試みとして千葉県中央博物館で作成した「野草カード」を使った観察会を行った。5~6名毎のグループに表面に野草のカラー写真があり裏面にその解説のついているカードを10種類渡し、カードを頼りに野草を探す方式である。児童たちはビオトープ内を走りまわって熱心に野草探しを行い、殆どのグループが全て探すことが出来た。全部見つかった時の達成感を喜ぶ児童たちの嬉しそうな姿が印象的であった。

(篠崎 将)



ビオトープ夏の風物—ザリガニ釣り

名戸小2年生 53名

7月8日(火)、午前10:30~11:30。名戸ヶ谷小2年生53名によるザリガニ釣りが行われました。小枝に糸を垂らし、その先にスルメをつけた児童が笛を合図に4つのポイントで一斉に釣りを開始しました。さおの糸がからんだために泣きべそをかく女の子。コツをつかんで矢継ぎ早に釣りあげる子……一時間で10匹以上も釣りあげる子が何人もいました。釣りあげたザリガニは各自ポリの容器に入れて学校へ持ち帰りました。最後にビオトープを代表して「田んぼに穴をあけるザリガニ」のお話をしました。(広報担当)



ひとくちインタビューから カッコ内の数字は釣り上げた数

- むずかしかったけど楽しかった。(女子、5匹)
- お母さんからもお兄ちゃんからも2匹まではいいよ、って言われたから。(女子、2匹)
- 大きいのが釣れてよかった。(男子、8匹) ○すごかった！(男子、12匹)
- あとになってからどんどん釣れた。(女子、10匹)

ボーイスカウト:生きもの観察の後に

6月22(日)、ボーイスカウト柏第7団ビーバー隊員、指導者、父兄を対象とした生きもの観察会を行った。この日は曇りで、一時小雨の降る生憎の天気だった。昆虫類の飛翔は殆どなく、水中生物を中心に採取したものを観察した。その後、全員でザリガニ釣りをし、真赤なハサミを持つ大きなザリガニを次々と釣り上げていた。またやりたいというスカウトも多く、大変な人気であった。(篠崎 将)



合同作業日の報告



6月21日は10名が参加して草刈りを行いました。草刈りは二つの目的があります。一つは、ビオトープの周囲に生える雑草を刈り取り美しい環境を保つこと。もう一つは、ビオトープの中の湿地性の小型植物を保護するためです。湿地は放置しておくとヨシやガマがはびこるため小型植物は住めなくなり、単調なヨシ原になってしまいます。湿地の多様な植物を保護するためにはヨシやガマを刈り取る必要があります。また、外来種も湿地に侵入してきますのでこれも刈り取ります。6月21日は今年最初の大掛

かりな草刈りとなりました。お陰で、Bゾーン北側には夏になると可愛いアカバナなどが見られると思います。(佐々木 光正)

千葉県からビオトープに補助金支給

生物多様性体験学習推進事業補助金として県環境生活部自然保護課から名戸ヶ谷ビオトープに100万円が支給されることになった。これは本来学校内ビオトープに対して支給されるものであるが、名戸ヶ谷ビオトープは学校ビオトープとして活用されていることが認められたものである。柏市環境保全課、名戸ヶ谷小学校、同PTA、ビオトープを育てる会が一体となって協議し、申請していたものである。県からの度重なる指導や視察もあり、洗い場、トイレ、観察用品に充当予定で、補助金の使途は「こどもビオトープフォーラム」で発表する予定。(篠崎 将)

名戸ヶ谷ホタルと柏ホタル事情

名戸ヶ谷のホタル

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会のホタル生きもの部会では、松清さんが中心となって、ホタル復活のための活動—ホタル復活ゾーンの整備、幼虫の放流など—を行っています。ホタル復活の条件が厳しいようで、残念ながら今年も飛翔を確認することは、7月末時点でできていません。

しかし、名戸ヶ谷地区でホタルが残されている場所があります。それは名戸ヶ谷病院とケイヨーD2の間の水路で、以前ホタル観察会も行った場所です。ここは名戸ヶ谷病院の駐車場からのゴミの不法投棄などで荒れていますが、今年もホタルの飛翔を確認しました。7月15日の夜10匹ほどです。ただし、ここもゴミなどで荒れてきており、今後は心配なところですよ。

中原のホタル

中原小学校の裏手の湿原林一帯は今年もかなりのホタルの飛翔が見られました。ここは柏ホタルの会が中心になって保全に取り組んでいます。中原小学校が幼虫飼育に取り組んでおり、4年生を中心に飼育して、4月には放流しました。その甲斐もあって、今年も例年より少し遅れ気味だったのですが、7月中にはピークで50匹ぐらいの飛翔が見られました。

柏ホタルの会が主催の市民ホタル観察会が都合7日ほど開かれ、合計の来場者は1800人ほど、恒例で行っているホタル募金も8万5千円ほどに達したということです。注目点は、手賀沼水系の印西市にゲンジホタルが棲息しており、その幼虫の放流も行ったところ、ゲンジも若干飛翔したということで、ゲンジが復活したとなると大きなニュースでしょう。写真は柏ホタルの会が招待した老人養護施設の方々の来場の様子です。車椅子からの観察で、ホタルを見ることができて大喜びだったとのことですよ。



花野井のホタル

柏北部の柏ビレジの中程にある花野井小学校では、校内にあるビオトープでホタルを飛ばせたいと言うことで、柏ホタルの会に指導要請がありました。柏ホタルの会では、その要請に応じて、昨年からのホタル幼虫の飼育方法を教え、花野井小の生徒が取り組んできました。今年放流したところ、ホタルの飛翔があったということで、7月19～20日、地域や父兄に呼びかけて観察会を開きました。ピークでは20匹位の飛翔があり、来場者は大喜びでした。飼育1年で、ホタルの飛翔までいったというのは、この学校ビオトープが湧水も含んだ好条件だったことが大きいようです。この地域、父兄を中心に「花野井のホタルを守る会」結成の動きがあり、将来はここも柏のホタルの拠点になることが期待されます。(高田 昭治)



南国の夜を彩るホタルの群れ

マレーシアの首都クアラルンプルから約50km、車で一時間のところにセランゴール川が流れていて、そこが有名なホタルの群生地である。この川はここから10kmほど流れてマラッカ海峡に注ぐのであるが、川の両岸は何種類かのマングローブが密生している。川幅は30m位であろうか、観光客は20人位の小船に分乗して真っ暗な川を下ると、まもなく両岸に光の塊が連続して現れる。3～4m位のマングローブの樹に密集したホタルである。月並みではあるが、やはりクリスマスツリーを連想する。この光の集団が連続して、或いは点々と連なるのであるが、辺りはねっとりした熱帯の空気で、また、人口の照明が全く無い真の闇であるから神秘的である。

聞けばホタルにも好きな樹と嫌いな樹があるらしく、集まる樹は決まっているらしい。分泌する樹液などが関係するのだろうか。いずれにしても忘れられない光景である。(村川 五郎)

ビオトープの花

ビオトープには3種類のガマが生えています。ガマ、コガマ、ヒメガマです。ガマの花は茎の先に細長い円柱形になってつきます。円柱形は二つに分かれ、上が雄花、下が雌花です。雄花は花粉を散らした後は消え、受粉した雄花が残ります。3種類の見分け方は、葉の幅が広いのがガマ、細いのがコガマとヒメガマです。ヒメガマは雄花と雌花が少し離れて隙間に茎が見えるのが特徴です。花の咲く時期も異なり、ガマは6月、ヒメガマは7月、コガマは8月です。ビオトープでもっとも勢力強いのがヒメガマで、Bゾーンで大きな群落を作って生えています。それに比べ、ガマとコガマは少なく、特にコガマについては注意して保護する必要があります。(佐々木 光正)



ビオトープと私 第1回

40余年間のサラリーマン生活を終えるに際して、何か地域のことに関わった活動をしたいと思っていたところ、平成15年2月「名戸ヶ谷ビオトープを育てる会」の発足と会員募集を知り、早速参加しました。この5年間には不耕起稲作作業を中心に幹事の方々の後について活動を続けてきました。

このビオトープは湧水を水源にし、住宅に囲まれた1画で、都会のオアシス的存在であり、周辺市民にとっては心休まる憩いの場所です。自宅から約1km程であり、私の散歩コースの一つであり、時間が許すかぎり訪れることにしております。このビオトープの散策で春先の草木の一斉の芽吹き、卵囊からオタマジャクシに更に手足が出て蛙へとの変態、夏の稲の旺盛な生育、ザリガニの元気な動き、秋には赤トンボの飛来や蒲や葦の出穂、冬の薄氷等の生態の変化を見て微妙な季節の移り変わりを直に感じさせてくれます。

また、農家育ちの私にとって、60年ぶりの水田での田植え、田の草取り、稲刈り作業、続く天日干しのハザ掛け、足踏み脱穀、唐箕選別等の作業は懐かしいものであり、元気を蘇らせてくれるものであります。更に、作業後にお茶を飲みながらの仲間との取り留めの無いおしゃべりは元気を喚起する楽しいひとときでもあります。このビオトープはこれからも私の生活の中に占める領域をますます広くしていくようです。(影山賢三)

編集後記

炎暑の夏がやってきました。コナギに打ち勝った今年の田んぼでは立派に育った稲の青い波が微風に揺れ、秋の収穫時への期待を抱かせてくれます。今回から新企画として連載「ビオトープと私」を始めました。広く会員のみなさんからの投稿をお願い致します。また、季節柄、「ビオトープの生きもの」に代わって「ビオトープの花」を始めました。今年も列島各地での熱中症が心配される中、汗まみれで雑草取り作業をされた会員のみなさん、ごくろうさまでした。(広報担当 春山)